

恵信尼公のお手紙

中央仏教学院講師 北島隆晃



親鸞聖人の奥様である恵信尼公は、聖人の越後流罪中や関東での伝道生活など、聖人とともに行動し、晩年は越後で暮しました。京都におられた聖人が弘長二（一二六二）年十一月二十八日にお亡くなりになったことは、末娘の覚信尼公から手紙で知らされたようです。その手紙を受け取り、聖人のことを懐かしく回想して書かれた返信や、自分の身の様子などを娘に伝える恵信尼公のお手紙（「恵信尼消息」）が現在まで伝えられていて、『註釈版聖典』に八通が収められています（『註釈版聖典』809頁）。

この手紙には、あまりご自身のことを語られなかった聖人の若い頃のことや、恵信尼公とご一緒に行動されていた頃のこと、恵信尼公が聖人とどのように接しておられたかなどが記されています。これによって、聖人のご生涯や聖人と恵信尼公の生活、恵信尼公と覚信尼公との間柄などを知ることができます。

その中で、「殿の比叡の山に堂僧つとめておはしましける」（同814頁）という一段は有名です。殿（親鸞聖人）が比叡山で修行中、常行三昧堂の堂僧をつとめていらっしゃったというのです。そして、

山を出でて、六角堂に百日籠らせたまひて、後世をいのらせたまひけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせたまひて候ひければ、やがてそのあか月出でさせたまひて、後世のたすからん縁にあひまるらせんと、たづねまらせて、法然上人にあひまるらせて
(同811頁)

と書かれています。比叡山を下りて六角堂に百日間籠もり、後世を念じておられたところ、九十五日目の明け方に、夢の中に聖徳太子のお示しを受けて、すぐに法然聖人のもとへ行かれた、というのです。六角堂は聖徳太子、観音菩薩ゆかりの京都のお寺です。聖徳太子、観音菩薩によって、在家の生活を営む中で救われる教えに導かれたのです。

出家して厳しい修行によりさとりを開く教えは、誰でも歩むことができる道ではありません。普段の生活の中で、いろいろなことにかかわりながら、悩みをもって暮らす凡夫にとって、迷いを離れることができる教えとは、阿弥陀仏の慈悲に救われていく他力の念仏だったのです。

法然聖人が説いておられた念仏は、まさしく在家のものが救われる教えであり、「生死出づべき道」でした。親鸞聖人は、ついに二十九歳の時、そ

の教えに出遇ったのです。

しかし、聖人の長い人生には、このようなこともありました。

げにげにしく三部経を千部よみて、すごう利益のためにとて、よみはじめてありし、(中略)人の執心、自力のしんは、よくよく思慮あるべしとおもひなしてのちは、経よむことはとどまりぬ。(同816頁)

これは、聖人が四十二歳頃のことです。聖人は、人々が苦しむ様子を見かねて、人々を救うために經典読誦を始められました。しかし、信心を得て、仏のご恩を感じながら生きる他力の念仏に出遇いながら、經典読誦によって利益を得ようとするとは、人が持つ執着の心、自力の心はよくよく気をつけなければならないのだと感じられ、中止されたのです。

このように、日々阿弥陀仏の光明に照らされながら、我が身の姿に気がかされる毎日を、聖人とともに過ごされた恵信尼公でありました。その中で、恵信尼公は聖人のことを観音菩薩の化身と敬われながら生活されていたのです。お手紙の中には次のようにあります。

観音の御ことは申さず候ひしかども、心ばかりはそののうちまかせては思ひまるらせず候ひしなり。かく御こころえ候ふべし。

(同813頁)

親鸞聖人が法然聖人を勢至菩薩の化身と敬われたように、恵信尼公も親鸞聖人を観音菩薩の化身と敬い、普通の人とは思わずに過ごしてこられたのです。そして、聖人の往生にあたり、娘である覚信尼公にも、父親鸞聖人がそのような方であったことを心得ておいて欲しい、と伝えておられるのです。恵信尼公の覚信尼公に対する思いは、お手紙の次のような言葉にも窺えます。

はるばると雲のよそなるやうにて候ふこと、まめやかに親子の契りもなきやうにてこそおぼえ候へ。ことには末子にておはしまし候へば、いとほしきことに思ひまるらせて候
(同819頁)

遠く離れて暮らす娘に、どんなことでもいつも手紙で聞かせてもらいたいが、はるかな雲の彼方のように離れているので、細やかな親子の情を心ゆくまで交わすことが出来ない。末の子であるあなたは、とりわけいとおしく思えてなりません、というものです。

親鸞聖人のことを懐かしく思い出しながら、浄土で会うその日まで、お念仏申しながら生かさせていただきましょと、聖人が歩まれた念仏の生活を娘に伝える恵信尼公の思いを窺えます。

このように、親鸞聖人と恵信尼公は、阿弥陀仏の救いの光の中、念仏の毎日を過ごす家庭を築かれていたことが、お手紙を通して伝わってきます。

(教学伝道研究センター研究員：真宗学)